

教材活用シリーズ 第76回

☆日図協加盟出版社の発行している教材について、実際の授業における活用例、より効果が得られるポイント(場面・方法)などを紹介します。

マニユアルを超えた活用術

「はなまる漢字スキル」の優位性に基づいて

(株)教育同人社
『はなまる漢字スキル』



ながしま としゆき
永島 俊之
(千葉県館山市小学校教員 永島教育研究所)

序 『はなまる漢字スキル』の優位性

『はなまる漢字スキル』を使う。永島の教室では、ほとんどの子どもが漢字テストで満点を取ることが当たり前になっている。

その理由は次の二つであると考ええる。

- 一 『はなまる漢字スキル』そのものの優位性
- 二 マニユアルを超えた活用術の駆使

以下、これら二点について述べる。

一 『はなまる漢字スキル』そのものの優位性

「漢字スキル」と名のつく教材はあまたある。そのなかで教育同人社の『はなまる漢字スキル』には次の点で優位性がある。だから永島は採択するし、隣の教室の担任も採択する。

- ① 大きな活字が子どもに優しい
- ② 「念押し」が子どもに優しい
- ③ 豊富な熟語で語彙が広がる

① 大きな活字が子どもに優しい

「ステップ1 おぼえる」にある新出漢字の活字の大きさが教科書に掲載されている新出漢字よりもはるかに大きい。四年生のスキルであっても一年生の教科書よりも大きい。

通常のスキルの活字では、細かい部分は漢字が苦手な子どもにとって、ややもすると黒い塊に見えてしまう。しかし、これだけ大きければ細部を正確に確認することができる。

② 「念押し」が子どもに優しい

『はなまる漢字スキル』は次の四つのステップをふむ。

- ステップ1 おぼえる
- ステップ2 れんしゅう
- ステップ3 たしかめる
- ステップ4 テスト

これらのステップの構成には論理がある。他の漢字スキルも同様である。しかし、『はなまる漢字スキル』は、その論理に従ってただ機械的に作られているのではない。

「念押し」があるのである。

ステップ1では、「なぞり書き」「写し書き」「試し書き」で終わらずに、さらに「なぞり書き」と「試し書き」の欄が設けてある。覚えたかを「念押し」できる工夫である。

ステップ3では、どのくらい書けるようになったかを確かめる。さらに下の欄にもう一度書くスペースがある。「念押し」である。自信のない

子どもにも勇気をもたせることが可能である。
この「念押し」の欄があることは、漢字が苦手な子どもにも大変優しい構成であるといえよう。

③豊富な熟語で語彙が広がる

ステップ1のページの下段にその新出漢字を使った熟語が四つずつ見やすく掲載されている。授業中いくつかを取り上げて辞書を引かせる。その後、子どもたちは家庭などでの自主学習で、意味のわからない熟語を調べる。

豊富な熟語の提示が、子どもの語彙が広がる機会づくりとなっている。

二 マニユアルを超えた活用術

『はなまる漢字スキル』にはマニユアルが掲載されている。しかしその真価を発揮し、子どもを伸ばすためには、マニユアルを超えた活用術が必要となる。

その活用術は、プロ教師の経験のなかから編み出されてきたものであり、教師から教師へ受け継がれているものも多い。

ここでは、そのなかでも、永島が考えたあまり一般的ではない裏の活用術をひとつ①と、よく知られている特に重要な活用術を二つ②③紹介する。

- ① 「ため」を入れる
- ② 宿題前に必ずチェックを入れる
- ③ 生活の中に新出漢字を使わざるを得ない場を

① 「ため」を入れる

例えば、四年生の一学期には「松」という漢字を教える。空に人差し指で一斉に大きく書かせる場面がある。「存じ「空書き」である。子どもたちは一斉に声を出しながら書く。

「イチニイサンシ、ゴオロオク、シイチハチ」
これではだめである。書き順は確かに覚える。また、払いや曲がりも意識することができ。しかし、これでは次の不備が生じる。

- 漢字が苦手な子どもには速すぎる
- 始筆があいまいになる

永島は次のように唱えさせながら「空書き」をさせる。

「んイチ、んニ、んサンシ、んゴオロオク、んシイチハチ」

つまり、一画一画始筆のうち、いったん止めて入る部分は「ん」と「ため」を入れながら唱えさせるのである。

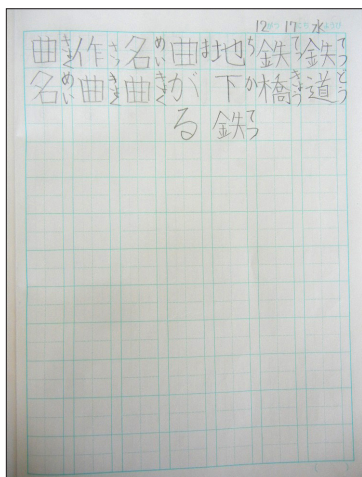
こうすることにより、各画の始筆の場所を確認できる。何よりも漢字が苦手な子どもも確認しながらついていける。

書き順は合っているとしても、始筆の位置がいまいだど、「友」と「反」などは同じ「空書き」となってしまう。そういったときは、例えば次のように指導する。

「交わりは『十』ですか？ 『T』ですか？」
この「ため」は指書きのときも意識させる。
これだけで見違えるほど丁寧に書けるようになる。

②宿題前に必ずチェックを入れる

新出漢字は必ず授業で取り扱う。一日に二字か三字である。最後に漢字ノートに熟語をひとつずつ書かせる。その下を埋めてくることが宿題となる。



しかし、間違いを放置すると、子どもは間違った漢字を練習して、それが定着してしまふ。

そこで、右のように書いた時点で、正しく書かれているかを担任がチェックする。
不備がある場合は書き直させる。そこをチェックすることで初めて宿題の価値が生まれる。

③生活の中に新出漢字を使わざるを得ない場を

使わない漢字は忘れてしまふ。そこで、毎日の連絡帳の一行日記に新出漢字を使うよう指導している。新出漢字を使った子には活用していることをほめて感謝する。クラス全体に紹介する。

また自主学習で漢字の練習をしてきた子が百点を取ったときは、全体の場で、お手本になってくれたことに感謝する。自分から練習すると集団に貢献できることを実感させるのである。